

あけのほし 2015 年 6 月

## 「社会の暮らしと聖書」

菊田行佳

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。…盗んではならない。」

(出エジプト記 20 章 2 - 3, 15 節)

教養として聖書を学ぶということでここで書かせて頂いていますが、今回は私たちの社会生活にとって、古典としての聖書がどのような意義を持っているのかを、少し述べさせて頂きます。

小学校中学年の社会科の教科書を見る機会がありました。そこには、地域社会がどのような人々で成り立っているのかを、地図と照らし合わせながら学ぶように書かれています。その中で、子どもたちが接する身近な場所として、スーパーマーケットが大きく取り上げられていました。スーパーには、生活に必要な様々な品物がそろっていて、とても便利であると書かれています。その良い点として、非常に合理的で製品はバーコードを通してコンピュータによって管理され、在庫管理や人気商品、の管理などを一括で容易にできるのだと記されています。私が子どもの頃の教科書だったら、確かスーパーマーケットではなく、商店街に並ぶ八百屋、肉屋、魚屋などが載っていたと思われま。地域にもよりますが、現在は車で乗り付けることが出来る広い駐車場を持っている店がより良いと書かれています。

このように、合理性を追求して、より便利で効率的なことを良いものとして追い求める性質が、どの人間にもあるわけです。そのこと自体を否定する考えはなく、むしろもっと本当の意味で合理的に、社会の仕組みを整備した方が、より良い暮らしを私たちはして行けるのだというのが聖書の立場です。たとえば、スーパーマーケットは、確かに良いところが沢山あるわけですが、しかしそこで働く人同士の関係や、あるいは店員さんとお客さんの交流というような点に目を向けますと、規模を大きくして人員管理を複雑にすることのデメリットがあることに気がつくでしょう。大きい店の一人の従業員は、どうしても「歯車の一人」として存在価値が薄くなりがちです。自分が辞めたところで、昨日と変わりなく営まれて行く職場というのは、なかなかその中で唯一無比の所属することの意味を見いだせないと思います。「替わりはいくらでもいるんだから、文句言っていないで給料分の仕事をこなしてくれよ」といった雰囲気を感じて、空虚感を感じることもあることでしょう。

社会科学的な学問においては、どうすれば最も効率的に人々を管理出来るのかを学ぶことが出来ます。また、従業員の気持ちを改善し、共同作業をより協力的なものに変えて行く改善策なども学べます。ただ、それらの学びの中には限界があり、どうしても力の強い側の論理が優先して働くという壁を越えて行けない現実があることも確かなことではないでしょうか。

聖書から学ぶ意味はそこにあります。なぜなら聖書の神は、すべての人間を、何者かの「奴隷」から解放する神だからです。冒頭の聖書箇所は、エジプトの管理国家で、奴隷として扱われていた人々を救い出し、「これからは何人たりともあなたたちを奴隷として扱わないようにするために、わたし（神）があなたたちに与える掟（おきて）である」として語られたところ。一人の人間を建築物を建てるための労働力としてしか見ておらず、生かさず殺さずの状態であったエジプトの王から、神は人々を解放しました。そして、これからは誰もあなたたちの自由を奪うことなく、人としてわたしが与えた権利（人権・尊厳）を、「奪ってはならない」と掟（人権保護の法律）によって守ることで、恒久的に一人の人間として大切に扱われる道を整備したのです。ですから、どんなに権限をもっている雇用主であっても、神が与えた人間の尊厳を粗末に扱ってはなりません。自分が気に入らないからと言って、「明日からは職場に来なくて良い!」などとは、決して言えないわけです。

そしてこれらの神の与える人権保護の論理は、決して経済的・政治的効率と対立するものではないというところが、大切なところ。実は、社会の中で、どの人間であっても、神聖にして犯すべからざる存在として大切に扱うことは、最も合理的で効率がよい社会のあり方なのです。一見、使い捨てのように労働者を粗末に扱い、どんどん次から次へと入れ替えていった方が利益を得られると思われそうですが、しかし労働力の再生産と持続可能な安定社会という点で見れば、そのやり方は実に非効率的で、合理的精神に反するものだとわかるのです。そしてまた、社会全体に目を向けたとき、たとえ製品を生み出すといった点で非生産的で、役に立たない人であっても、それらの人々の存在を大切に扱うことは、実はこれも社会を安心・安全に保つための重要な要素になっています。競争原理によって常に緊張を強いられて馬車馬のように働くよりも、たとえ労働者として経済の歯車から脱落しても、大切な社会の構成員だと受け入れられる社会の方が、互いを信頼した共働的關係がより豊かに形成されるのです。北欧の国々は聖書からその知恵を学んで社会造りをした典型的な例です。

マルクス、フロイト、ニーチェなどにより、聖書や宗教は人々を抑圧して、強者の言いなりにするための社会的装置だとこれまで学んだ人も、いるかと思われ。しかし、本来の聖書が示す神の知恵は、その逆です。確かに聖書の神は、人間が抱える「罪」を追求し、その「罪」の言いなりにしている人間と闘っています。それゆえ、罪を断罪する神が、人間を卑屈にさせ、言いなりにコントロールする存在と思われがちなのも確かです。しかし、神が人間の罪と闘うのは、あらゆる人間に対する抑圧から解放するためなのです。人が人を支配して、奴隷として従属させるのが、人の罪の正体です。そこから自由にし、抑圧に抵抗するために闘うことを迫るのが、真の聖書の神の姿です。社会科学から進んで聖書を学んで行ったとき、きっとそのことがわかると思います。次回は人文科学との関係で記す予定です。